

特別の教科 道徳

田部 彩香

1 研究主題との関連について

(1)「教科等本来の魅力」について

特別の教科 道徳の魅力は、一人一人が自分なりのより望ましい生き方を考えることができる点にあると考える。道徳科で育む内面的資質は、個人内での価値の高まりや変容によって形作られる。対話的な学習を通して、問題をどのように捉え解決していくか自分なりに考えを深め、自分の生活に還元しようとする過程にこそ道徳科を学ぶ意義があると言える。

(2)「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

①「見方・考え方」

「道徳科の魅力に迫る」とは、「一人一人が自分なりのより望ましい生き方を考えている」ということである。そのためには道徳科の「見方・考え方」を働かせ、他者の感じ方や受け止め方を認め、それらと自分の価値観を擦り合わせながら、多面的・多角的に物事を考えることが必要になるであろう。本校道徳科では、魅力に迫る子どもの姿をより具体的に想定するために、並列で用いられる「見方」と「考え方」を個別に整理している（表1）。

表1 「道徳科の魅力に迫る」ための「見方・考え方」

「見方」		「考え方」	
道徳的諸価値の理解を基に、自己との関わりの中で多面的・多角的に題材を捉える視点		自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める方法やプロセス	
〔知性的な価値判断〕 題材を社会通念や社会規範などと照らし合わせて価値や行為の望ましさを捉えようとする見方	〔感性的な価値判断〕 異なる価値や他者の存在を考慮せず、題材と向かい合う直感的な見方	〔自己を見つめる〕 知的理解と心情的理解の齟齬に気付くとともに、無自覚の判断基準を明確にする考え方	〔自己の生き方について考える〕 他者の意見を認め、自身の意見と比較し、価値判断をする考え方

「見方」とは、道徳的諸価値の理解を基に、自己との関わりの中で多面的・多角的に題材を捉える視点のことである。それは知性的な見方と感性的な見方に大別できる。知性的な見方とは、題材を社会通念や社会規範などと照らし合わせて価値や行為の望ましさを捉えようとする見方であり認知面の働きが強い。道徳的価値を統合、選択して判断し、知的に題材と対峙している状態である。道徳的諸価値の理解を深めるためには、思考する視点を焦点化した知性的な価値判断が必要であり、価値の知的理解が得られる。他方、感性的な見方とは、異なる価値や他者の存在を考慮せず題材と向かい合う見方であり情意面の働きが強い。三浦（2016）は感性を「包括的、直感的に行われる心的活動およびその能力」と定義し、論理を基盤としない判断や思考であり、答えの精度が保証されない代わりに、回答に至るまでの時間が少ないという特徴をもつ日常的な直感判断だとしている。つまり、感性的な見方では、他者の存在を度外視し、題材と自己との関係のみを考察の対象とした瞬時の価値判断である。このような感性的な判断は、題材に含まれる望ましくない行為に対しても共感するなど心情的理解を生むことがある。

「考え方」は自己を見つめる考え方と、自己の生き方について考える考え方の二つに分けて捉える。

道徳科では、時として知性的な判断と感性的な判断が食い違い、知的理解と心情的理解に齟齬が生じることがある。このような時こそ自己を見つめなおす機会であり、よりよい生き方について考えることができる。また、三浦（2016）は、「感性による判断が直感的であるとは、論理的な判断や思考ではないため、時として言語的な説明が困難であり、判断の理由を自覚できない場合も多い」とも述べている。十分に言語化できない判断や、無自覚の判断基準を明確にしていくことは、自己を見つめなおすことにつながる。このような場面は、個人内での思考であり、自己を見つめる考え方を働かせている。自己の生き方についての考え方を働かせるためには、他者の意見を認め自身の意見と対等に比較し、価値判断をすることが重要となるだろう。そのためには、多様な意見と協働的な学習形態が有効だと考える。子ども同士が互いの直感的な判断について考えたり、判断の根拠を交流したりする対話的な学習を取り入れることで、子どもの新たな価値の発見や変容が期待できる。

以上のことを踏まえ、魅力に迫るための「見方・考え方」とは次のようなものであると考える。この考えを図に表すと、図1のようになる。

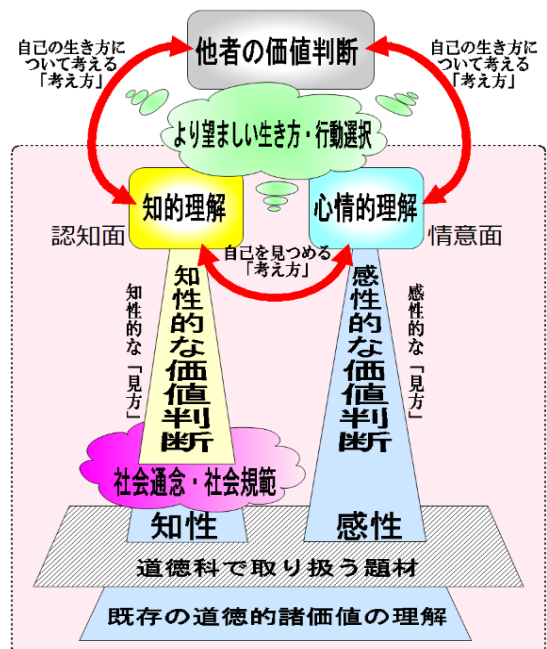


図1 魅力に迫るための「見方・考え方」

【道徳科の魅力に迫るための「見方・考え方」】

知性や感性を働かせて価値判断を行い、知的理解と心情的理解のずれに気付き、自分自身や他者との対話的な学習を通して、より望ましい生き方や行動選択に迫る見方や考え方

②授業モデル ー問題解決的単元型学習ー

道徳科は、道徳教育の要としての役割を担っている。道徳科の授業での学びをきっかけに、普段の生活をより豊かなものにしたり、自分自身の生き方を考えたりする実践的な態度を育成することが求められている。これは、子どもたちが道徳科の授業と実生活との関連を意識することができないと実現は難しい。そのためには、教師が道徳科と実生活との接続を具体的に図ったり、意図的に実施時期を設定したりすることが必要である。また、題材に含まれる価値や扱う内容項目同士の親和性などを考慮しながら、子どもたちの学習の方向性を担保することも、子どもたちの学びを連続させるためには欠かせない心構えであると言える。そこで、本校では複数の教科書教材や他の教育活動との効果的な関連を図って特定の学習課題の解決に向けた授業モデルを構想・実践してきた。それが問題解決的単元型学習である。

【問題解決的単元型学習】

〈道徳科の授業作りの構え〉

- ・複数の教材や道徳科の授業以外の教育活動との効果的な関連を図る。
- ・道徳科の魅力に迫るための「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を取り入れる。

〈魅力に迫る子ども像〉

道徳科の「見方・考え方」を働かせて道徳的な問いに対する自分なりの答えをもち、価値理解を深めたり、自己の生き方を見つめたり、よりよい生き方を志向したりしようとする子ども。

なお、問題解決“的”としているのは、構想した単元の時間数だけでは個人の問題が解決されない場合が多いためである。また単元“型”としているのは、他の教科の単元とは異なり各時間に明確な順序性や関連性があるわけではなく、必要に応じて特別活動や他の教育活動を組み込むことで単元時数が増える場合を想定しているためである。いずれも、道徳科の性質を考慮している。

③評価

道徳性に係る成長とは子どもの人格全体に関わるといった特質上、数値や到達度などでの評価をすることのないように留意する必要がある。とは言え、道徳教育においても道徳科においても、学習状況を評価することは学習者である子どもたちの実態を把握するとともに、子どもたち自身が成長を実感しながら意欲をもって学習に取り組んでいくために意義のあることである。

道徳科の学習で扱う内容項目に順序や序列はなく、実生活においては複雑に関連し合う事柄であるため、個々の内容項目を評価するのではなく大きくくりなまとまりを踏まえて評価することが大切である。他者と比較をすることなく、個人のよさに積極的に目を向けながら記述式で評価を行うことで、一人一人の成長を認めたり、励ましたりする個人内評価が求められる。そのためにも、一定のまとまりのある学習活動の中で適切な評価を行うことは有効である。それと同時に、子どもたちの一時間の学習の様子を評価することで、授業者自身の授業改善の手がかりとすることも求められる。その際は、明確な意図のもとに指導計画を立て、指導と評価を一体化しながら運用していくことで、その後の指導の改善を図ることが可能となる。子どもたちが学習を振り返ったり、学習後の生活に見通しをもったりする学習活動を取り入れる必要がある。

このような評価の基本的な考え方を踏まえ、本校では発話記録やその分析、ワークシートの記述分類、イラストによる振り返りの実施（小学校低学年）、hyper-QU テストによる集団の様相の変化の分析、I C E ルーブリックを活用した学び方の評価など、様々な方法で子どもたちの学習実態の検討と授業の効果の分析を試みてきた。また、児童が見通しや課題意識をもって学習を進めたり、子どもたちの姿を一定期間で評価したりできるよう、単元構想に基づく学習過程を組み込んだ実践を行ってきた。

（３）道徳科の魅力に迫るための「教師の資質能力」について

昨年度より、道徳科においても魅力に迫るための教師の資質能力について整理することを試みている。ここまで述べてきた基本的な考え方の上で実践を重ねてきた結果、表２のようにまとめることができた。

表２ 道徳科の魅力に迫るための「教師の資質能力」

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・ 様々な教育活動を意識して、問題解決的な学習過程を構想する力（目標設定） ・ 子どもの発達段階に即して、道徳的価値を解釈する力（教材研究）
授業実践力	・ 認知面と情意面に触れながら、個人内の価値判断をゆさぶる力 ・ 子どもの心が動いた背景を探り、価値理解につなげる力 ・ 効果的に対話的な活動を取り入れる力 ・ 教材を通した学びを実生活へ接続する力 ・ 児童実態（学年差を含む）に応じて価値理解への支援をする力
授業分析・評価力	・ ねらいに照らして子どもたちの記述内容を、質的分類をする力 ・ 必要に応じて、複数の評価材（評価方法）を併用する力

2 本年度の研究計画

(1) 研究の目的

子どもの実態に応じた道徳科の指導法の工夫 ―教師の資質能力を活用して―

(2) 研究の方法

「問題解決的単元型学習」に則り授業実践を行い、子どもたちの学びの様子を質的（必要に応じて量的）に評価し、実践の有用性を検討する。

(3) 検証の方法

ワークシートの記述内容や授業中の発言などを評価材とし、1時間ごとの子どもたちの価値理解及び価値獲得の過程を考察すること、題材同士の関連やその効果についての検討を行うことなどを通して、単元全体の構成に関わる学習効果の検討をする。

【引用・参考文献】

岡山県小学校道徳教育研究会(1997),『子どもとつくる総合単元的な道徳学習』東洋館出版社.

押谷由夫 (2017),『アクティブ・ラーニングを位置づけた特別の教科道徳の授業プラン』, 明治図書

鈴木由美子, 宮里智恵(2019),『やさしい道徳授業の作り方 (改訂版)』 溪水社.

田村学(2018),『深い学び』 東洋館出版社.

田沼茂紀(2017),『道徳科授業の作り方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』 東洋館出版社.

三浦佳世(2016),『感性認知 ―アイステークスの心理学―』 北大路書房.

渡邊満, 押谷由夫, 渡邊隆信, 小川哲哉(2016),『「特別の教科 道徳」が担うグローバル化時代の道徳教育』 北大路書房, pp.91-104.

渡邊満, 押谷由夫, 渡邊隆信, 小川哲哉(2016),『小学校における「特別の教科 道徳」の実践』 北大路書房.

文部科学省(2017),『新しい学習指導要領の考え方 ―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―』.

文部科学省(2016),『教育課程部会 考える道徳への転換に向けたワーキンググループ資料4 ―道徳教育について―』.

文部科学省(2017),『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説「特別の教科 道徳編」』.

広島大学附属東雲小学校 (2023),『令和4年度教育研究初等教育』.